

ツングース諸語の受身

風間 伸次郎

1. はじめに

ツングース諸語は10ほどの言語からなる。Ikegami(1974)によれば、主に音韻対応の面から、ツングース諸語は以下のように分類される。II群にはさらに中国領で話されるヘジェ語(Hz)が、IV群にもやはり中国領で話されるシベ語(Si)が分類されると考えられる。本稿で扱う言語には下線・太字を施した。

- I 群 エウエン語, エウエンキー語, ソロン語, ネギダル語
- II 群 ウデヘ語, オロチ語
- III 群 ナーナイ語, ウルチャ語, ウイルタ語
- IV 群 満州語, 女真語

本稿では、まずコンサルタントの協力を得ることができたソロン語について、本特集の他の言語に合わせたアンケートの結果を提示する。その後、I群ではエウエン語、II群ではウデヘ語、III群ではナーナイ語、IV群では満洲語について、筆者が現地調査で収集したテキスト資料から判断できる受身の状況や、先行研究の記述をまとめることにする。

なおツングース諸語は、典型的にみて日本語にもよく似たタイプの言語で、もっぱら接尾辞による膠着型言語である。語順はHead-final、つまりSOVで修飾語-被修飾語の語順をとる。日本語と大きく異なる点は、(1)満洲語などを除き、基本的に動詞の人称変化があること、(2)大部分の言語(II, III群の言語およびI群の言語の多く)はHead markingの所有構造(属格を持たず、所有者名詞は主格と同形で、被所有名詞が所有人称接辞をとる)を持つこと、(3)否定動詞による否定構造を持つこと(I, II群の言語とIII群の言語の一部)、などである。アルタイ諸言語に共通してみられることであるが、母音調和を持つ(なお母音調和による異形態は基本的に省略した)。表記は基本的にIPAをベースにした音素表記によるが、一音素一文字の原則などの理由から、次のような独自の音素表記も用いている: č[tc], j[dz], ŋ[n].

2. ソロン語

ソロン語は中国内蒙古自治区のホロンバイル地方に主に分布する言語で、生業は遊牧である。中国では鄂温克 (èwēnkè) 語 (エウエンク語) と呼ばれている。ツングース諸語の中では、言語・文化の両面でモンゴル語の影響をもっとも強く受けた言語である。コンサルタントは現在東京外国語大学に留学中の学生で、1974年に伊敏ソムに生まれ、そこで育った女性である。

1) A は B に叩かれた

a. ilaan ilgaɑ-dʊ mandaa-wʊ-saa.

人名 人名-DAT 叩く-PASS-PAST

イラーンはイルガーに叩かれた。

b. ilgaɑ ilaam-ba mandaa-saa.

人名 人名-ACC 叩く-PAST

イルガーはイラーンを叩いた。

a が受身文、b は対応する能動文である。受身を示す接辞 *-wʊ* は、母音語幹につく時の形で、子音 (非鼻音) 語幹につく場合には *-bu*、鼻音語幹では *-mu* となる。さらに母音調和があるため、*-bu/-bu/-wʊ/-wu* のような異形態を示す。格枠組みに注目すると、日本語同様、受身文では能動文の行為者が与格で現れている。なおツングース諸語一般に、主格は明示的な形を持たない。またこの場合、動詞における三人称単数主語の人称接辞も明示的な形を持たない。動作主および被動主が固有名詞でない例文を示せば以下のようなものである。

c. bii ʊnaajɪ nʊxʊn-dɪ-wɪ mandaa-wʊ-s-ʊ.

私 女の 年下の兄弟-DAT-POSS.REFL 叩く-PASS-PAST-1sg

私は自分の妹に叩かれた。

ここに現れている再帰人称接辞 (*-wɪ*: POSS.REFL) は必ず主節の主語の人称と一致する。この点は以下で扱う文の構造の理解に重要な点であるので注意されたい。受動文の特徴について、特に先の例文 a と変わるところはない。

2) A は B に足を踏まれた

a. ilaan ilgaa-du bældiir-i-wi əxi-wu-səə.
 人名 人名-DAT 足-E-POSS.REFL 踏む-PASS-PAST
 イラーンはイルガーに足を踏まれた。

b. ilgaa ilaa-nii bældiir-wə-n/bældiir-du-n əxi-səə.
 人名 人名-GEN 足-ACC-POSS.3sg/足-DAT-POSS.3sg 踏む-PAST
 イルガーはイラーンの足を／足に踏んだ。

やはり a が受身文，b は対応する能動文である。このようにいわゆる間接受身の持ち主の受身でも，直接受身同様に受身文を作ることが可能である。なお能動文において，体の部分を示す名詞には対格も与格も可能であるという。固有名詞でない例文をあげれば次のようである。

c. bii axin-di-wi bældiir-i-wi əxi-wu-s-u.
 私 兄-DAT-POSS.REFL 足-E-POSS.REFL 踏む-PASS-PAST-1sg
 私は自分の兄に自分の足を踏まれた。

3) A は B に財布を盗まれた

a. bii xulxa-du piŋkuusu-wi xulxa-wu-s-u.
 私 泥棒-DAT 財布-POSS.REFL 泥棒する-PASS-PAST-1sg
 私は泥棒に自分の財布を盗まれた。

b. xulxa minii piŋkuusu-w xulxa-saa.
 泥棒 私.GEN 財布-ACC 泥棒する-PAST
 泥棒が私の財布を盗んだ。

筆者はソロン語では体の部分ではない「持ち物」に関して，受身文は成立しないものと考えていたが，事実はそうではなかった。受身文において能動文の属格名詞が主語に昇格しても，再帰人称接辞によって財布が主語のものであることが明示されることが，この構文を成立させている重要なポイントであると考えられる。

4) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった。

- a. tiinug dolbo minii urəl(-wəl) soŋo-čči,
昨日 夜 私.GEN 子供(-POSS.1sg) 泣く-ANT.CVB
xondokkon=kəd aasin-i-m ə-s-u ətə-r.
少し=PTCL 眠る-E-SIM.CVB NEG-PRS-1sg できる-PTCP
昨日の夜、私の子供が泣いて、少しも眠ることができなかった。

- b. *bii urəl-di-wi soŋo-wu-s-u.
私 子供-DAT-POSS.REFL 泣く-PASS-PAST-1sg
*私は子供に泣かれた。

このように自動詞からの受身は不可能で、能動文により表現することがわかる。意味的によく似ている次のような文は可能であるというが、これは ačči-「吠える」という動詞が能動文で対格目的語をとるので、直接受身の文である。

- c. bii ninixim-di(-wi) əčči-wu-s-u.
私 犬-DAT(-POSS.REFL) 吠える-PASS-PAST-1sg
私は犬に吠えられた。

5) 新しいビルが (A によって) 建てられた。

- a. ikkin gvd juu ədu juu-səə/il-saa.
新しい 高い 家 ここに 出る (建つ) -PAST/立つ-PAST
新しい高い家がここに建った。
- b. ikkin gvd juu-w ədu jawu-saa.
新しい 高い 家-ACC ここに 得る-PAST
新しい高い家をここに建てた。
- c. ??tajaa gvd juu xarlančaa-du ilu-wu-saa.
あの 高い 家 人名-DAT 立てる-PASS-PAST
??あの高い家はハイランチャーに建てられた。

- d. xarılančaa tado gød jūu(-w) ıluv-saa/jawu-saa.
 人名 あそこに 高い 家(-ACC) 立てる-PAST/得る-PAST
 ハイランチャーがあそこに高い家を建てた。

xarılančaa (ハイランチャー) はソロンの人たちの英雄の名前である。a, b のように能動文で言い表すのが普通であり, c のような受身文はかなりおかしいという。直接受身ではあるが, やはりこのタイプの文での受身は容認度が低いようで, 能動文が用いられることがわかる。

6) カナダではフランス語が話されている。

ソロンの居住域には, ロシアと国境を接している地域があるので, より身近なロシア語についての文に変更した。

- a. luota-du xokko luota ug-ii jınji-ran.
 ロシア-DAT 皆 ロシア 言葉-INDF.ACC 話す-PRS
 ロシアでは皆ロシアの言葉を話している。

- b. luota-du xokko luota-ji jınji-ldii-ran.
 ロシア-DAT 皆 ロシア-INS 話す-RECP-PRS
 ロシアでは皆ロシア語で互いに話している。

- c. luota ug naan olgoja-du jınji-wu-ran.
 ロシア 言葉 も オルグヤ-DAT 話す-PASS-PRS
 ロシア語もオルグヤでは話されている (なおオルグヤはロシア国境に近い村の名前)。

- d. luota ug olgoja-du naan jınji-wu-ran.
 ロシア 言葉 オルグヤ-DAT も 話す-PASS-PRS
 ロシア語はオルグヤでも話されている。

ふつう a, b のような能動文を用いるという。しかし, なんらかの対比や強調により, 対象を主語にしたい場合, c, d のような受身文も用いられるという。

7) 財布が (A に) 盗まれた。

a. piŋkuusu-wi xɔlxa-wɔ-s-ɔ.

財布-POSS.REFL 泥棒する-PASS-PAST-1sg

(自分の) 財布が盗まれた (私は)。

b. tajjaa bitəg xɔlxa-wɔ-saa.

あの 本 盗む-PASS-PAST

あの本が盗まれた (そこに置いてあった本で、誰のかわからない、その本について話している場面での発話であるという)。

c. tajjaa bitəg xɔlxa-dɔ xɔlxa-wɔ-saa.

あの 本 泥棒-DAT 盗む-PASS-PAST

あの本が泥棒に盗まれた。

ソロン語の場合、a にみるように、対象物には所有人称接辞がつき、動詞にも主語を示す人称接辞がつくので、これらの支えにより被影響者が特定できるシステムがある。

ただし b や c のように、はっきりとした被影響者が特定できないような場合でも受身文が用いられるという。

8) 壁にその絵が掛けられている。

a. tajjaa dusəə-du nɪrɔgan/nɪrɔgam-ba lox-soo.

その 壁-DAT 絵/絵-ACC 掛ける-PAST

その壁に絵を掛けた。

b. dusəə-du nɪrɔgan loxo-wɔ-saa.

壁-DAT 絵 掛ける-PASS-PAST

壁に絵が掛けられた。

c. tajjaa nɪrɔgan dusəə-du loxo-wɔ-saa.

その 絵 壁-DAT 掛ける-PASS-PAST

その絵は壁に掛けられた。

- d. tajjaa nirogan dusəə-du loxo-wu-taan bi-ji-rən.
 その 絵 壁-DAT 掛ける-PASS-SIM.CVB いる／ある-PROG-PRS
 その絵は壁に掛けられた状態で、ある。

ふつうこのような内容に対しては a, b のような能動文を用いるという。ただし c, d のような受身文も使えるという。このようなケースについては、やはり自然なテキストを多く収集し、それを成立させている前後の文脈を検討してゆくなど、帰納的な研究が必要であろう。

9) A は B に／B から愛されている。

- a. əwəŋkə-səl xarılančaa-w ajawu(-ji)-ran.
 ソロン-PL 人名-ACC 愛する(-PROG)-PRS
 ソロンの人々はハイランチャーを愛している。
- b. xarılančaa əwəŋkə-səl-du aal=xad joo-mu-ran.
 人名 ソロン-PL-DAT いつ=PTCL 思い出す-PASS-PRS
 ハイランチャーはソロンの人々にいつでも思い出される。
- c. əwəŋkə-səl xarılančaa-w aal=xad joon-on.
 ソロン-PL 人名-ACC いつ=PTCL 思い出す-PRS
 ソロンの人々はハイランチャーをいつも思い出す。

ここでも a, c のような能動文による表現がふつうであるという。しかし「いつでも」などのある種の強調語句がある場合に、b のような受身文も使用可能であるという。

10) A は B に／から「...」と言われた。

- a. minii ənin-bəl minəw, “jəəm-i ga-čči əmə-xə,” gun-čəə.
 私.GEN 母-POSS.1sg 私.ACC 物-IND.ACC 買う-ANT.CVB 来る-IMP 言う-PAST
 私の母が私に、「買い物に行って来て、」と言った。

- b. bii ənin-di-wi, “jəəm-i ga-čči əmə-xə,” guŋkən
 私 母-DAT-POSS.REFL 物-IND.ACC 買う-ANT.CVB 来る-IMP と
 guŋ-mu-s-u.
 言う-PASS-PAST-1sg
 私は母に、「買い物に行って来て、」と言われた。

ここでも a のように能動文を用いることが普通であるが、b のような受身文も用いることができるという。

- 11) A さんは B さんに呼ばれて、今 B さんの部屋に行っています。
 B さんが A さんを読んで、A さんは今 B さんの部屋に行っています。
- a. nadnaa naggaa-du əəri-wu-čči,
 人名 人名-DAT 呼ぶ-PASS-ANT.CVB
 əsi (naggaa-nii) juu-du-n nən-čəə.
 今 (人名-GEN) 家-DAT-POSS.3sg 行く-PAST
 ナドナーはナッガーに呼ばれて、今 (ナッガーの) 家に行っている。
- b. ??naggaa nadnaa-w əəri-čči,
 人名 人名-ACC 呼ぶ-ANT.CVB
 əsi nadnaa naggaa-nii juu-du-n nən-čəə.
 今 ナドナー ナッガー-GEN 家-DAT-POSS.3sg 行く-PAST
 ??ナッガーがナドナーを読んで、今ナドナーはナッガーの家に行っている。

この場合には、日本語と同じように、a の受身を用いた文がより自然である（わかりやすい）という。やはり複文中では、節間で同じ主語を維持したほうがわかりやすいということなのだろう。

以上ソロン語における受身についてみてきた。以下でみる II 群や III 群のツングース諸語に比べて、受身の接辞の頻度は高く、その使用範囲もかなり広いものであることが窺える。

3. エウエン語

エウエン語は北東シベリアから北極海に向けて分布する言語で、カムチャッカ半島などにも話者がいる。エウエン語の被害の文構造 (adversative construction) に関しては、Malchukov(1993)に詳しい記述がある。この言語では被害の意味が生じる状況でなら、かなり自由に「受身」が作られる。以下の例文に見るように、自動詞の受身、持ち主の受身などに相当する機能の構文が全て可能である。筆者自身も現地調査に基づき作成したテキストで自動詞からの受身などを確認している (風間 2003)。以下の例文は Malchukov(1995:21-24)より引用する (表記は一部変更している、グロスも筆者による)。

- 12) ətikən nugdə-du maa-w-ra-n.
おじいさん クマ-DAT 殺す-PASS-NONFUT-3sg
おじいさんはクマに殺された。
- 13) ?kuŋa ənin-di awa-w-ra-n.
子供 母親-DAT.POSS.REFL 洗う-PASS-NONFUT-3sg
?子供は自分の母親に洗われた。
- 14) kuŋa baa-mɪ aw-ŋa ənin-di
子供 嫌がる-COND.CVB 洗う-NEG.CVB 母親-DAT.POSS.REFL
awa-w-ra-n.
洗う-PASS-NONFUT-3sg
子供は嫌がっていたが、自分の母親に洗われた。
- 15) ətikən (imanra-du) imana-w-ra-n.
おじいさん (雪-DAT) 雪が降る-PASS-NONFUT-3sg
おじいさんは雪に降られる。
- 16) bujusəmŋə buju-m ɪla-w-ra-n.
獵師 トナカイ-ACC 立つ-PASS-NONFUT-3sg
獵師はトナカイに立ち上がられてしまった。

- 17) mut arisag-du əmə-w-rə-n.
 私たち (INCL) 幽霊-DAT 来る-PASS-NONFUT-3sg
 私たちは幽霊に來られた。
- 18) holičan beədələ-i ənə-lə-w-rə-n.
 キツネ 足-POSS.REFL.sg 怪我する-INCH-PASS-NONFUT-3sg
 キツネは足を怪我してしまった (直訳: キツネは足を傷つけられた)。
- 19) ətikən nugdə-du gia-j maa-w-ra-n.
 おじいさん クマ-DAT 仲間-POSS.REFL.sg 殺す-PASS-NONFUT-3sg
 おじいさんはクマに自分の仲間を殺された。

12)のように、まず直接受身が成立する。しかし、中立的な状況、すなわち主語に何らの被害も及ばないような状況では受身文は不自然に感じられる (13))。この場合、文脈によって何らかの被害が生ずれば問題は無くなる (14))。自動詞からの受身が成立する (15), 16), 17))。持ち主の受身も成立するが、これは体の部分だけでなく、他の主体であってもかまわない (19))。ツングース諸語の中でも I 群の言語、中でも特にこのエウエン語はきわめて広い受身の用法を持っている。これが後から発展してきたものなのか、それともツングース諸語の古い特徴を残しているのかについては、今後の研究を俟たねばならない。

4. ウデヘ語

ウデヘ語はロシア極東の沿海州に分布する。ウデヘは狩猟民族である。ウデヘ語には、日本語やエウエン語で用いられているような受身の形式はない。それらの言語で受身を用いるような状況では、一般に能動文を用いて表現する。ただし、行為者が不特定であるいくつかの状況では、非人称態と呼ばれるものが用いられる。その他に、被動形動詞と呼ばれるものがある。ここではその二つについて実例を見ながら説明する。なお、以下にみる形動詞とは、日本語の古文の連体形に似た機能を果たす形式である (すなわち、現代日本語の連体形に準体法 (名詞的用法) の加わったような機能を果たす形式である)。ウデヘ語の例文は、風間(2004, 2005)による。

非人称態は -u- である。非人称態には現在形 (-u-i) と未来形 (-u-jaŋa) があるが、過去形 (*-u-wa) はない。非人称態は広い意味を持っている。

- 20) 適切な行為・当為「～すべき」:

ono nixə-u-ǰəŋə.
 どう する-IMPERS-FUT.PTCP
 どうすべきか!?

- 21) 自発的行為:

mindu baŋčala-u-i.
 私.DAT 蹴る-IMPERS-PRS.PTCP
 私に蹴らせろ.

- 22) 一般的, もしくは恒常的なできごと, 適切な行為・当為「～すべき」:

diga-mi ə-u malapta, jəu.
 食べる-SIM.CVB NEG-IMPERS 尽きる 何
 食べても無くならない, 何か [謎々]
 odoo mafa waa-a-ma-ni ə-u-i ǰawa.
 トラ 祖父 殺す-PAST.PTCP-ACC-POSS.3sg NEG-IMPERS-PRS.PTCP 取る
 トラが獲ったものに手をつけてはならない.

- 23) 可能(性)「～できる」:

əi odu jəu=də saŋa-wa-ni ə-u-i waa.
 今 ここで 何=PTCL 鳥の糞-ACC-POSS.3sg NEG-IMPERS-PRS.PTCP 殺す
 今日ここでは何もろくなものが獲れない.

- 24) 受身:

nəxusə, ələə nii-du waa-u-laga-mi nixə-i
 妹 もう 人-DAT 殺す-IMPERS-PURP.CVB-POSS.REFL する-PRS.PTCP
 jəu, sii utə=bədə.
 何 おまえ そんな=PTCP
 妹よ, もうすぐ人に殺されようとしているのか, おまえは, こんなふう.

さらに, ウデヘ語には受動形動詞 -sa (<-ča) がある. これはもっぱら名詞的に, 文

の補語として、もしくはコピュラ文の述語として用いられる。ただしこの形式の出現頻度はあまり高いとはいえない。

25) ini mənɔdə sii-sə.

何 丸ごと 剥ぐ-PASS.PTCP

(皮だの) 何だのを全部剥いであった。

ʃaunɔ-wa ula-sa bi-ə gune-ø.

コクチマス-ACC 漬ける-PASS.PTCP いる/ある-PAST.PTCP 言う-PRS.IND

コクチマスを水に漬けてあったという。

このように、受動形動詞 -sA はもっぱら他動詞のみにつき、行為の結果として残った物を示す。エウエンキー語およびネギダル語のもっとも一般的な動詞の過去形 (-ča ~-čaa) はこれと同源であると考えられる。

5. ナーナイ語

ナーナイ語はロシア極東のアムール河中流域に分布する。ナーナイは漁労民族である。ナーナイ語における状況はウデヘ語におけるそれとよく似ている。受身と呼ぶにふさわしい形式はなく、動作主が不特定のである場合には非人称の表現が用いられる。その形式は非人称形動詞現在 -ori / -uri, 非人称形動詞過去 -oxan / -uxən である。これはさらに -o-ri, -o-xan のように分析することも考えられるが、-o/-u はこれ以外の形式を後ろに取ることがないため、もはや融合したものとして分析せずに扱う。その他にウデヘ語の -sa に対応する -ča があるが、かなり化石化しており、その生産性は限られているようだ。

しかし、さらにナーナイ語には、複文において主語不転換の機能で用いられる使役の形式が、受身のような意味を実現することがある。以下では上記の三つの形式について順にみていく。

まず非人称形動詞現在の用例をみよう。その機能はウデヘ語で見たものとよく似ている。

26) 適切な行為・当為「～すべき」:

xooni ta-ori.

どう する-IMPERS.PTCP.PRS

どうすべきか？

- 27) 可能（性）「～できる」:

pikte-ji baogo-ori=m ačia murči-ə.
 子供-POSS.REF.sg 再会する-IMPERS.PTCP.PRS=PTCL NEG.PAST 思う-INF
 わが子に再び巡り会えるとは思っていなかった。

- 28) 受身:

aag-bi xorigo-ori-wa gələ-mi soŋgo-i-ni.
 兄-POSS.REF.sg 救出される-IMPERS.PTCP.PRS-ACC 求める-SIM.CVB 泣く-PTCP.PRS-3sg
 (彼女は) 自分の兄が救出されることを求めて泣いている。

- 29) 目的・用途

nar-ci pulsi-uri tətua-səl
 人-DIR 行き来する-IMPERS.PTCP-PRS 服-PL
 人の所に（お客に）行く時に（着るべき）服

このように非人称形動詞はさまざまな意味で実現するが、その基本は動作主が不特定のであるということに変わりはない。もっとも頻度が高いのは「適切な行為・当為（～すべき）」の用法である。

次に被動形動詞の -ča をみる。これはウデヘ語の -sa に比べ使用頻度が低く、かなり固定化した語彙としてのみ用いられるものようである。

- 30) asi-ni nuktə-ji pačri-ča-wa-ni čaali-xa-ni.
 妻-POSS.3sg 髪-POSS.REF.sg 編む-PAST.PTCP-ACC-3sg 切る-PAST.PTCP-3sg
 妻の髪が編んであった（編まれていた）のを（その夫は）切り落とした。

最後に、主語不転換のために用いられる使役が受身的な意味で実現する場合についてみよう。まず、31)にみるように、-waan は使役を示す接辞である。31)は一般常識的におかしな内容の文になっているが、コンサルタントに作成してもらったものである。

- 31) tugdə tugdə-wəəŋ-kim-bi. mii čakpa-xam-bi.
 雨 雨が降る-CAUS-PAST.PTCP-1sg 私 濡れる-PAST.PTCP-1sg
 雨を降らせた。私は濡れてしまった。

しかし、従属節中にこの使役の接辞 -waan を用いた場合 (32)) には、使役の意味は無くなり、33)と同じような意味で実現するという。すなわち、ここで使役の形式は、従属節と主節の主語を統一するために役立っているのであり、結果として受身のような意味を実現していることになる。

- 32) tugdə tugdə-wəən-dəə, mii čakpa-xam-bi.
 雨 雨が降る-CAUS-ANT.CVB 私 濡れる-PAST.PTCP-1sg
 雨が降って、私は濡れてしまった／雨に降られて私は濡れてしまった。
 (ただし、直訳すれば「雨を降らせて私は濡れてしまった」)

- 33) tugdə tugdə-xə-ni. mii čakpa-xam-bi.
 雨 雨が降る-PAST.PTCP-3sg 私 濡れる-PAST.PTCP-1sg
 雨が降った。私は濡れてしまった。

このようなツングース諸語における使役の接辞の諸機能に関しては、風間(2002)も参照されたい。

6. 満洲語

満洲語になるとさらに状況は変わる。津曲(2002:76)は、満洲語の -bu は使役にも受身にもなるとし、次のような例をあげている (グロス は筆者による)。

- 34) kiyoo de te-fi jakūn niyalma be tukiye-bu-fi
 かご DAT 座る-ANT.CVB 八 人 ACC 担ぐ-CAUS/PASS-ANT.CVB
 かごに座って八人に担がせて

- 35) sargan de eime-bu-mbi.
 妻 DAT 嫌う-CAUS/PASS-IND.PRS
 妻に嫌われる。

どちらの意味かは文脈や自動詞か他動詞かによって、たいてい判断できる上に、一般に被使役者は対格の -be, 受身の動作者は与位格の -de で示される(津曲 2002:76)と記述されている。ただし久保(1986)によれば、他動詞使役文では両方の格の例があり、やはり格だけではその意味を区別できないことが指摘されている。

このように満洲語では使役と受身が同じ要素によって示されるが、これはモンゴル語における状況とよく似ている。満洲語は全般にモンゴル語の影響を強く受けて成立してきた言語であるので、この点もモンゴル語の影響によるものと考えられる。

7. おわりに

以上、五つの言語にわたって、ツングース諸語における受身的な意味の実現についてみてきた。ソロン語およびエウエン語の受身の接辞 -wu および -w, ウデヘ語の非人称態 -u, ナーナイ語の非人称形動詞 -o(rn), 満洲語の使役/受身 -bu, の各要素は同語源の要素である可能性が十分考えられる。しかしその機能(使用される範囲)は互いに大きく異なっている。満洲語におけるその機能をモンゴル語からの影響とみた場合、エウエン語などの受身らしい機能と、ウデヘ語などの非人称的機能のどちらがより古い機能を保持してきたと考えられるだろうか? より系統的に離れたII群とIII群に見出されることから、非人称的機能が本来的なものであったとみることもできよう。しかしこれは大きな問題であり、今後さらに慎重に検討してゆく必要がある。

通時的展開はひとまず措くとしても、ツングース諸語では一つの語族内で、受身的な意味の実現が言語によってさまざまなバリエーションを示していることがわかる。これは通言語的に受身という現象を考える上でも非常に興味深いことであるといえるだろう。

略号・記号

= 付属語境界 / 1(1st person) 1 人称 / 3(3rd person) 3 人称 / ACC(Accusative case) 対格 / ANT.CVB(Anterior converb) 先行副動詞 / CAUS(Causative) 使役 / COND.CVB(Conditional converb) 条件副動詞 / DAT(Dative case) 与格 / E(Epenthetic vowel) 挿入母音 / FUT(Future) 未来 / GEN(Genitive case) 属格 / IMP(Imperative mood) 命令法 / IMPERS(Impersonal participle) 非人称形動詞 / INCH(Inchoative) 開始アスペクト / INCL(Inclusive) 1 人称複数包括形 / IND(Indicative mood) 直説法 / INDF.ACC(Indefinite Accusative) 不定対格 /

INF(Infinitive)不定形／NEG(Negative verb)否定動詞／NONFUT(Nonfuture tense)非未来／PASS(Passive)受身／PAST(Past)過去／PL(Plural)複数／POSS(Possessive)所有人称／PROG(Progressive aspect)進行アスペクト／PRS(Present)現在／PTCL(Particle)付属語／PTCP(Participle)形動詞／PURP.CVB(Purpose converb)目的副動詞／REFL(Reflexive)再帰人称／RECP(Reciprocal)相互／SIM.CVB(Simultaneous converb)同時副動詞

参考文献

- Ikegami, J. 1974. Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Berlin: Akademie-Verlag, pp.271-2.
- Malchukov, A. L. 1993. The syntax and semantics of the adversative constructions in Even, *Gengo Kenkyu*, No. 103, The Linguistic Society of Japan, pp. 1-36.
- _____ 1995. *Even*, LANGUAGES OF THE WORLD/Materials 12, LINCOM EUROPA.
- 風間伸次郎. 2002. 「ツングース諸語における「使役」を示す形式について」, 『環北太平洋の言語』 vol.8, ELPR(Endangered Languages of the Pacific Rim) Publications Series A2-012, 津曲敏郎編, 吹田: 大阪学院大学.
- _____ 2003. 『エウエン語 テキストと文法概説』, ツングース言語文化論集 23, ELPR Publications Series A2-030, 吹田: 大阪学院大学.
- _____ 2004. 『ウデヘ語テキスト(A)』, ツングース言語文化論集 24, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- _____ 2005. 『ウデヘ語テキスト2』, ツングース言語文化論集 31, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 久保智之 1986. 「満洲語文語の使役・受動構文についての一考察」, 『九大言語学研究室報告』第7号.
- 津曲敏郎 2002. 『満洲語入門 20 課』, 東京: 大学書林.